



# 秋の街

吉村昭

文藝春秋

# 秋の街

吉村昭

文藝春秋

秋の街

昭和五十九年十一月十五日 第一刷  
昭和五十九年十二月十五日 第二刷

定価一、一〇〇円

著者 吉村昭

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷 精興社

製本 加藤製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

あとがき	船長泣く	焰髪	花曇り	さそり座	赤い眼	雲母の柵	帰郷	秋の街	目次
229	189	165	145	127	95	55	31	5	

装帧  
安彦胜博

秋  
の  
街



秋  
の  
街





浦川は、出門証を守衛に渡すと、銀杏の樹のかたわらに立つ光岡に眼を向けた。構内の銀杏の葉はほとんど落ちつくし、光岡の足もとにも黄色い葉がひろがっている。

教育課にそなえつけられた背広の中から体に合いそうなものを選んで着せたが、袖が長く、手の甲も半ば近くまでかくれている。肩幅が標準よりかなり広く、それに合わせたので背広がだぶついている。

光岡は、面映ゆそうな表情をして上衣の裾をいじっている。白髪のみじった髪は七・三にわけられ、髭も剃られていた。

出門時刻を帳簿に記載した中年の守衛が、若い守衛とともに出てくると、高い鉄柵の正門をひき開けてくれた。浦川は光岡をうながし、連れ立って門の外に出た。

背後で門の閉じる音がした。構外作業以外の目的で受刑者を連れて所外に出ることはあるが、その折は同行する職員は複数以上で、しかも受刑者には手錠をかけておくのが常であった。なんの処置もほどこされていない者と二人きりで門を出るのは初めてで、手錠を携行することも許さ

れていない自分が心もとなく思えた。

「いい天気でよかったな」

かれは、並んで歩く光岡に声をかけた。

「はい」

光岡は、まぶしそうに空を見上げた。

罽雲が、澄んだ空にひろがっている。雨の日をのぞいて日に三十分間運動場に出るだけのかれには、路上で浴びる陽光が別のものに感じられているのだろう。

石垣の角を曲ると、歩道を進んだ。街路樹の葉は落ち、樹と樹の間に寒菊が寄り添うように咲いている。

「これからバスに乗って保護観察所へ行く。バスの乗り方は、ビデオで見てわかっているな」

浦川が言うと、光岡は、はい、と答えた。昨日の午後、教育課の部屋で仮釈放にそなえ「巷は今」と題するビデオテープを映写してみせたが、その中には公衆電話の掛け方、列車、電車の乗り方とともにワンマンバスの乗車方法もふくまれていた。

「車掌はいないんだぞ。おれが先に料金を払うから見習え」

浦川は、光岡の横顔に眼を向けた。光岡は、かれより十一歳上の四十九歳だが、年齢より若くみえる。眼は澄み、唇も血の色をおび、歯も白い。

四日前、所長室に呼ばれた浦川は、所長が光岡に仮釈放事務の開始を告げるのを見た。光岡の顔には歎びの表情が浮び出ていた。口もとがゆるみ、唇の間から歯がのぞき、にぎりしめていた手が小刻みにふるえていた。光岡は、ぎこちなく頭をさげると、担当の職員にとまなわれておぼ

つかない足取りで部屋を出て行った。

同席していた教育部長が、浦川に顔を向けると、光岡の社会見学に行きすることを命じた。要領は、見学をさせるのに慣れている看守長の厚生課長から指示を仰ぐように、と言った。

思いがけぬ指令に戸惑いを感じたかれは、すぐに厚生課長の部屋におもむいた。

「私が君を推薦した。社会見学に連れてゆく職員は、臨機応変の判断力を持った者でなければならぬ。君にはその能力があると考えた」

課長は、坐ったまま東北訛りの強い声で言うと、机の上に置かれた書類を渡してくれた。

浦川は、書類を繰った。光岡の罪名は強姦、致傷、殺人で婦女暴行の前科があり、判決は無期刑であった。それにつづいて家族状況、服役後の受刑態度などが一覽表になっていて、四カ月前に仮釈放を願う所長の上申によって、地方更生保護委員会の光岡に対する委員面接がおこなわれたことも記されていた。

課長は、社会見学をさせる折の注意を口にした。まず受刑者であることを周囲の者に気づかれぬ配慮が必要で、監視の眼を向けたり必要以上に体を近づけたりせず、信頼しているような態度をとるべきだという。

「見学途中での逃走事故はありませんか」

浦川は、教育部長から光岡に同行することを命じられた時から胸にわだかまっていた不安を口にした。昨年の秋に北陸地方の刑務所から係長として転任してきたが、もしも事故を起せば降格され、職員としての将来にも大きな支障になる。資料によると、光岡は服役後二年ほどは反抗、反則をくりかえす処遇困難者で、その後は罰則をうけるようなことはしていないらしいが模範囚

であったという記載はない。背文は常人並みだが、骨格が逞しく腕力も強そうで、そのような男を自分一人に託されるのは不安であった。

課長は、当所での事故はないが、二年前に近畿地区の刑務所で一例発生している、と言った。その刑務所では受刑者を私鉄の保線工事に出役させていたが、仮釈放のきまっていた若い受刑者が逃走した。法定期限の四十八時間以内に帰所したかれに事情をきくと、休憩時に便所へ行った折、近くの映画館からきこえてくるジングルベルの旋律を耳にして、放心状態におちいり、気づいてみると線路沿いに走っていた。引返そうと何度も思ったが、仮釈放を取り消された上に懲罰を加えられるのが恐しく、走りつづけたという。

浦川は、気分が重くなった。光岡を街の中に連れ出せば、強い刺戟を受けて思わぬ行動に出ることも予想される。

かれは、かたい表情で課長の部屋を出た。

その日から、光岡の仮釈放にそなえる教育事務に立合った。教育部長、厚生課長、保護主任、篤志面接委員の出所に対する心構えについての講話がつづき、光岡は姿勢をただしてはい、はいと答えていたが、眼の焦点は定まらず話も耳に入っていないようだった。顔の筋肉はゆるみ、時折り笑いの表情になった。

その日も、朝食後、厚生課長から社会見学の注意をあたえられたが、落着きなく体を動かし、眼をせわしなくしばたいた。口もとのゆるみが消えたのは、その日使用を許される五百円紙幣一枚と百円硬貨五枚を課長から手渡された時だけであった。かれは、長い歲月、眼にすることもなかった紙幣と硬貨に深い感慨をおぼえたらしく、少しの間身じろぎもせずみつめていた。

バス停の前には、ジャンパーを着た長髪の学生らしい男が立っていた。浦川は、男の後ろで足をとめた。光岡は学生の髪と服装をひそかにながめ廻し、眼を細めて路上に視線をのばしていた。

車が往き交い、やがてバスが、フロントガラスを光らせて近づいてきた。

浦川が百円、と低い声で言うと、光岡は、背広の内ポケットから硬貨をつまみ出し、にぎりしめた。

バスが降り、男が乗った。浦川は、その後からステップに足をかけて光岡をうながし、合成樹脂製の料金箱に硬貨を落した。光岡は、こわばった表情で手にした硬貨を落し口に入れた。

バスが、動き出した。大学に通じる路線で、車内は学生が多く、かなり混んでいた。浦川は、光岡をふりむきながら奥に進んだ。四つ目のバス停でおるので、降車口に近づいておく方が都合であった。光岡もついてきたが、学生の体にさえぎられて動かなくなった。顔はかくれ、頭部が少しみえるだけであった。

浦川は、落着かなくなった。光岡のかたわらにもどりたかったが、信頼しているような態度をとりつつけると言った課長の言葉が思い起され、光岡の頭部に視線を向けていた。バスが停った折にひらいた乗車口から飛び出されれば、捕えることは困難になる。

かれは、バスが停止する度に、すぐにでも人の体を押しつけて出口にむかえる姿勢をとっていたが、頭部は動かなかった。

「光岡君、次で降りるからこっちへ来なさい」

浦川が声をかけると、光岡が少し乱暴とも思える動作で人の体をかきわけてきた。浦川は、停

レのボタンに手をのばし、押した。桃色の小さなライトがとまった。

バスが降り、降車口の扉がひらいた。浦川は光岡と降り、石畳の歩道を歩き出した。車道をへだてて白い土塀がつづき、角に奉行所跡をしめす木札が立っている。

光岡と肩を並べて歩いていることに、平静さをとりもどした。仮釈放の決定している光岡が愚かしい行動をとるとは思えぬが、発作的に事故を起すことも予想される。そのような気持を起させぬためには、光岡をさりげなく牽制しておく必要があった。

細い流れに沿った道を曲りながら、  
「入所してからどのぐらいたつ」

と、声をかけた。

「今日で十六年三カ月と二十一日です」

「長かったな。しかし、明後日は晴れて出所だ。それまでは自重し、反省して出所後の心構えを十分身につけるんだ」

浦川は、前方に眼を向けながら言った。もしも事故を起せばむろん仮釈放は取り消され、無期刑の身であるので生涯刑務所暮らしをしなければならぬ、と言いたかったが、自分が不安に思っていることを気づかれることを恐れ、口をつぐんでいた。

再び角を曲ると、道の左側に古びた洋風の木造の建物がみえ、その前で足をとめた。石づくりの門柱には、保護観察所と書かれた大きな板がかけられていた。

「教育課長から言われた通り、出所後、月に一度は必ずここに出頭し、近況報告をするんだぞ。それを怠ると、また刑務所に逆もどりだ、いいな」

浦川は、念を押すような口調で言った。

仮釈放を許された者には、刑の満期日まで保護観察を受ける義務を課せられるので、無期刑の者は、死ぬまで観察所に出頭をくりかえさねばならないが、十年ほどの間不祥事を起すこともなく過せば、恩赦という形で刑の終了処置がとられる。おそらく光岡は、長年の刑務所生活でそのような知識は得ているはずであった。

保護観察所の位置を教えることが社会見学の主要な目的の一つになっていたが、それに準ずる場所は市役所であった。出所後、一市民として生活するには、それに応じた手続が必要とされる。住民登録をはじめ各種の申告方法は事務機器の導入などによって変わってきていて、その概要を教えておかねばならなかった。

浦川は、光岡と観察所の門の前をはなれた。短い石橋を渡り、公園の中を横切ると、白い市役所の建物の前に出た。つらなる窓ガラスが、秋の陽光を浴びてまばゆく光っていた。

入口を入ると、左手に住民票、印鑑証明と書かれたパネルがさがり、奥の方に戸籍謄・抄本を扱うカウンターがあった。浦川は、記入台に近づくと重ねられた住民票や印鑑証明の登録・交付書の紙片を手にとって光岡にしめし、低い声で書き入れ方法を説明した。光岡は、神妙な表情でうなずいていた。

「次は駅だ」

かれは、光岡と市役所を出た。時計をみると九時四十分で、出門してからすでに四十分が経過していた。

市役所の隣は消防署で、署員が赤い車のボンネットを布で拭いている。煉瓦色をした農協の建



物の前を過ぎると、広い敷地に池や花壇のある公民館があった。

「久しぶりに外に出て、どんな気分だ」

浦川は、やわらいだ眼を光岡に向けた。

「膝頭がフックフックして、足に力が入りませんよ」

光岡が、苦笑した。

フックフックとは耳慣れぬ表現だが、足が宙をふんでいるような感じを言うのだろう、と思った。

浦川は、広い道の交差点で足をとめた。

「あれが青になれば渡れるんですね」

光岡が、横断歩道の信号を指さした。

「そうだ、ビデオで見たらう？ 青になると人の歩く姿が浮き出る」

浦川は、うなずいた。

信号が青に変わり、浦川は足をふみ出した。光岡が腕をつかんできた。左右におびえたような視線を向けながら小走りに歩いてゆく。

「車が多いだろう」

歩道にあがった浦川は、たずねた。

「はい。形が変わりましたし、種類も多くなっていますね」

光岡は、浦川の腕から手をはなすと、道を往き交う車に落着きのない眼を向けた。

車道は広く、中央に枯芝におおわれた分離帯がある。歩道沿いには鉄筋コンクリートの建物が並び、所々に銀行や証券会社の看板がみえた。